

モノを考える

寛 ボルテール（倫理文化研究センター専門研究員）

はじめに

犬型ロボットの映像をテレビやインターネットでご覧になったことがあると思う。それはアメリカのあるロボット企業が開発した犬型の4足歩行ロボットで、まるで生き物のように動き回ることができる。「ビッグドッグ」と名づけられたこのロボットは、もはや単なる機械ではない。その滑らかな動きに加え、砂利道や砂浜、雪上、また傾斜地も駆け足で上ることができる。さらに180キロの荷物を背負う力を持ち、GPS技術を利用して特定の場所へ自ら行くこともできる。しかし注目すべきはなんといってもその歩く姿が本物の犬と変わらないほど器用で自然な点であり、それを見てある種の不気味さを感じる人は多いに違いない。

また日本では芸能人マツコ・デラックス氏の等身大のアンドロイド「マツコロイド」も話題であり、メディアに頻繁に取り上げられている。その本人そっくりの顔と身体の形に加え、しぐさや表情、しゃべり方までまねており、本人ですら「気持ち悪い」という反応を示したようである。マツコロイドはあと少し手を加えれば本人と見分けがつかなくなるかもしれない。犬型ロボットも剥き出しになっているパーツの上に毛や目鼻などをつければ生きている「本物」の犬に間違えられるものになるであろう。近年のロボット技術は不気味を越えて、恐ろしさまで感じる。（しかし現在、犬型ロボットの開発事業は予算や用途の問題で中断されているようではある。）

これら生き物そっくりのロボットを見て「不気味」に感じるのは世界共通の現象のようだ。そのことは1970年代に、日本のロボット工学者の森政弘が初めて科学的に分析・解説し、発表したもので触れられている。森によると、人は人間や生き物に似せられた人工知能を持つロボットに対して、最初は好意的に思うかもしれないが、本物に近ければ近いほど、ある時点で「人間（生き物）のようだが何かがおかしい」と感じはじめ、そして不完全な人間（生き物）を想起し違和感をおぼえ、脳の中で好意的な気持ちが嫌悪感に変わるという気持ちの整理のプロセスがあるとのことだ。そしてこれらのロボットが本物と見分けがつかない程度になると、我々の脳の中は再び好意感に転じ、ロボットに対して親近感をおぼえるらしいのだ。森は最初の好意感から嫌悪感に変わるポイントを「不気味の谷」のスタート地点と命名した。グラフで示すとその気持ちの通過点から谷のように深いところ（いちばん不気味に感じる気持ち）に落ちていくからだ。しかしロボットの人間への類似度が高くなるにつれて、また嫌悪感の底辺から上昇し「不気味の谷」をのぼり、再び好意感の領域に入る、という。以来これは「不気味の谷現象」と呼ばれるようになった。半世紀近く前に提唱されたにもかかわらず、現在も様々な学問分野で研究が行なわれているという価値ある指摘である。

今日の人工知能やロボット開発は凄まじいほどの展開を見せており、このままだと近い将来我々ほどのロボットに対しても「不気味の谷」を通らずに、最初から好意感をおぼえることになりうるだろう。存在論上では、ロボットと人間は無機物と生物というそれぞれ違うカテゴリーに入るはずだが、科学の発展に伴いその二つの存在の間の境界線が大きくぼやけており、「生のないもの」と「命を有するもの」の違いがどこにあるのかますます不明瞭になっていくように感じる。

先日出版された倫理文化研究叢書6『生と死』、また昨年発行の『紀要』の論文においてこの「無機物」

と「有機物」の境目について、比較文化研究や文化人類学、自然科学の観点から序説的に記述し考察を行なった。これらの論文の一つの趣旨は倫理文化学で基本としている「モノに命がある」という考え方を解明する一つの手口にしようとするものであった。今回はこの「モノの命」の問題を考慮し、人間とモノ、または人間と無機物の相違や関係性について、各分野の学者・研究者の理論を紹介しながら考察を展開させていこうと思う。